

地球が宇宙の中心ではないことは古代から言われていたようだが、十六世紀以降コペルニクス、ブルーノ、ガリレオ、ケプラーが書物を発行した。当時のカトリック教会の教義と異なる提唱だったため圧力を受け、特にブルーノとガリレオは異端とみなされて弾圧を受けた。

異端審判を受けることは恐ろしいことだった。幽閉や火刑に処せられることもあった。カトリック教徒として葬ることも許されなかった。著書は禁書になり自分の考えが世間に伝わらなくなる、いわば抹殺状態である。このため科学者たちが自分の新説に関する書物を発行する際には、ストレートな表現を避けてポイントをぼかしたわかりにくい対話形式の物語にしていた。この表現法は、ソクラテスの問答法に由来する哲学の手法だったのかもしれない。

異端審問とは何か。宗教と政治が馴れ合い統治の安定を目指すようになると、教義について異なる意見を容認して放置することは政治的にも危険だと考えられた。これらは公会議などで討議され、誤謬とみなされた説は異端として退けられた。ローマに設けられた異端審問所では、神学者や学識の誉れ高い枢機卿たちからなる委員会が、特定の教説や著作に対して異端性がないかどうかを審議した。地動説のような科学の問題に宗教がなぜ口出しするのかと思うが、当時は科学の地位が低かったのだろう。

現代では「科学は宗教から独立し宗教の干渉を受けるべきではない」が基本的な考え方だと思う。しかし、科学が未知の分野に直面するとき、先に進めていいか止まった方がいいかの判断に迷うこともあるだろう。生命に係わる分野では遺伝子操作やクローンの生成、高エネルギーに係わる分野では原爆製造や反物質の生成やブラックホールの生成などがある。この判断を、昔は宗教が行っていたのかもしれない。

今は「科学倫理」なるものが判断基準を示すようだ。先に進めばパンドラの箱を開けることになるのかどうかを、まずは科学で予測する。予測が困難な場合は、進むか止まるかの判断は、岡目八目と言うように、当事者ではなく真に広い見識を有する有識者たちに任せるのが適当だと思う。ここで、思考レベルの低い政府関係者が責任を取らない不適切な有識者を選ぶと、ひどい判断がなされる事例を最近多く見せつけられた。選者のレベルを高めておくことが必須である。いずれにせよ完璧な答えは見いだせないだろうが。